



JIS-LISPに関する現状認識と私見

'87. 1. 22

井田.

1. 国際的状況の認識

米国での Common Lisp の標準化は、一部に技術的の方針は残されているものの、技術的な討議の段階をすぎ、ANSI のもと X3J13 委員会において着々と進んでいる。現在の手続きは、1988 年初頭には標準案が ANSI でまとめられ、実質的に決着すると思われる。

ヨーロッパにおける標準化は、EuLisp の仕様をまとめようとする研究段階から、各国の標準化機構それぞれに自国団体の支持を受けた公式の活動へと移行できるところかという段階にきている。ただし現在のところ EuLisp 処理系そのものを含めて現実的な言語としての形をとるにはいたっていない。

ISO における標準化は、フランスをコンビナ、米国をプロシグトエティタとしてその議論を開始する段階にまた。

2. 上記認識に基づく私見

86 年上期において、米国は Common Lisp をそのまゝ ISO 化することを前提としていたように思われる。関連するいくつかの出来事があった。しかし、ヨーロッパにおける一部の熱心な研究者たちの努力が次第に姿をあらわしはじめ、Common Lisp に対する具体的な対案が提示されるようになった。このヨーロッパにおける EuLisp は、その実体がどうこれから形成されていくかについて、もう少し見守る必要があるが、ヨーロッパの国数とを背景として一つの位置を持つ、この結果 ISO における今後の活動に重要な影響を与えるようになった。

この点から一時的には EuLisp 対 Common Lisp という対決色があったが、'86 年 11 月の ISO ミーティングにおける合意等により、相互の理解もしくは歩みよりの感じられるようになった。

総じて、次のような共通認識があるように思われる。

『産業のニーズに対応するためにも Common Lisp 標準の米国内での制定は価値があり、



急がれるが、これを2の3乗 ISO化しようとしても時間がかかり、その間 Lisp 関連の技術の進歩により、例えは5年後に、ISO Common Lisp ができても実質的な意味を失う可能性もある。それならば「現在ヨーロッパで始まった動きをどうして『Common Lisp の次』をゆくりと検討しよう。それならば Common Lisp の現在とつづいて位置・役割とヨーロッパでの活動を並行させることが出来る」この認識は、ヨーロッパ 米国共にあるように感じられる。

いすれにせよ '86年11月頃というのは一つの時点であったように思われる。

3. 日本における いきさつ (主に標準化関連について)

日本では、Lisp の標準を定める実質的な動きを反映して '85年より電子協において委員会が組織された。この委員会はいくつかの事務上の判断からマイコン技術委員会の下で専門委員会として始められた。'85年度は「Lisp 動向専門委員会」、'86年度は「Lisp 技術専門委員会」と呼ばれ、'87年度には「Lisp 技術委員会」となることが予定されている。なお '85年度 '86年度についてはその英訳名称として「Jeida Common Lisp Committee」を用いることが各年度の年一回の委員会で認められ使われてきた。この委員会は、月一回のペースで開かれ、またいくつかのWGを持ち、外資系も含め30社にのぼる組織から委員が派遣され活発な活動をする委員会の一つであった。この委員会の大きなねらいとしては、当時より実質的に国際標準の候補と創り出すことが予想された Common Lisp に対してその標準案の作成の過程において日本からのコメントを出し、十分に開かれた議論とさせる点にあった。Common Lisp という名称の一般名称化、Common Loops に発する オフショア指向機構の標準化と日本への公開、いくつかの小規模技術的な点での反映などには実績があった。なお現在、漢字標準案(略称)の提示、産業ベースのサブセット化などの点で期待され、またその活動がつつけられている。

'86年7月より JIS Lisp WG が始まり3年間の期間が与えられた。当初は Common Lisp をベースとすることを意識する方針でいたが、1,2で述べた認識により、日本ではまだ必ずしも処理系がそろっていない点、通産省からの



日仏ラウンドテーブルをふまえた、ヨーロッパを含む三極構造への意識、これにより方針の微調整を行っているのが現状である。

4. JIS-LISP の設計方針について

次の点を挙げて LISP 関連の育成をはかるために
具体的な設計の開始を行いたい。

- ① この JIS LISP WG で案がまとまり、それが世に出るのは
早くて 89 年度、おそらく 1990 年であろう。この時点は
ANSI のタイミツより遅く、おそらく標準的な平均的な ISO 決定
より早い。
- ② 当面の Common Lisp 対応は 電子協の 別委員会でも可能である。
したがって JIS LISP WG は ISO に 照準をあわせるべきである。
- ③ ここで案を作成する「JIS LISP」が あとに必要なのは 1 つの
LISP の祖語というわけではない。また、JIS LISP が決まりつつ
あるという LISP 関連の言語は 標準の研究・試作等が 止まるから
本来でなくてはならない。
- ④ LISP 関連の アプリケーション・処理系開発・教育 等を考慮して
極力 早期の標準化制定が望ましい。
- ⑤ 米国自身 Common Lisp (現在の) が 最後の LISP 仕様ではない、
といっている。数年後の改訂を想定して、それかとも合意した
新しい仕様をまとめるとしている。

以上